人々の祈りを込めて

所在地：東伊興 4-9-1　伊興遺跡公園展示館

子持勾玉（こもちまがたま）

■ 勾玉

勾玉は縄文時代から、古墳時代頃まで盛んにつくられました。埴輪（はにわ）などの昔の人を象（かたど）った人形などを見ると、勾玉はネックレスとして身につけられていますが、単なるアクセサリーではありませんでした。魂振（たまふり）や魂鎮（たましずめ）といった、勾玉を通して、魂に活力が与えられたり、身体から離れてしまいそうな魂を、体に定着させるための儀式の中でも使用されていたようです。

復元された古代の首飾り

■ 子持勾玉

足立区では子持勾玉という特殊な勾玉も発見されています。子持勾玉は大きな勾玉から小さな勾玉が生まれてきているように見えることから、その名前が付けられました。その形が何を形象したかは明らかではありませんが、5世紀の中頃（古墳時代中期）から作られるようになり、一説には、五穀豊穣や子孫繁栄といった願いを込めた祈りの際に使用された道具だったのではないかと考えられています。

文化財豆知識　石製模造品

勾玉は碧玉（へきぎょく）や水晶などの硬い石材でつくられ、加工が難しく、貴重品でした。足立区内の遺跡からはやわらかく加工しやすい石である滑石（かっせき）製の勾玉や剣・鏡を模したものが多く出土しています。祭祀では本物の勾玉・鏡・剣を使用せず、模造品で代用したことが想定されます。

出土した石製模造品